

人物で語る 日本デンマーク

③4 大見 為次^{ためじ} II

大見為次が農林学校を卒業して双葉舎^{ふたば}（青年会）に入るところ（一九一一年三月）、安城新田では、三年前の町長選挙のもつれが原因で、南部と北部に別れて争っていた。青年たちは、対立を仲直りさせねばと悩んだ。そして一九一三年（大正二年）八月、双葉舎は、青年たちに白米を各自二升ずつ持って神社に集まるように触れを出した。約四十名が集まった。青年が立ち上がらねばと、だれもが考えた。だが、策がなかった。

このとき、秘策を提案したのが為次だった。集落の幹部が和解するまで家には帰らない、畑仕事にも出ない、社務所に立て籠る、というものだった。両派の幹部からの使者が神社に連れられ、家へ帰れと説得を試みたが、為次は、使者と激論し、青年たちを激励した。そして七日目、ついに幹部総退陣、新人による集落一体化の報告が届いた。争っていた南部と北部は完全に一体となったのである。このときから人々の為次を見る目が変わったとい

う。彼は十九歳だった。

彼は以後、『双葉集』に独自の見解を次々に発表する。翌年三月号には「農業組織改造に於ける組合中心主義」という論文を発表。これは今村（現今本町・東栄町）をはじめ各地の鶏卵出荷組合の成功に注目し、農業組合を構成して共同出荷・共同購入をすすめれば、農家収入は上がり、生活改善が図れるというものだった。十年後には彼の論が現実のものとなり、碧海・安城は「日本デンマーク」と呼ばれるようになった。農業組合は、彼の集落には一九一九年（大正八年）、安城新田信用販売購買利用組合という形で実現した。双葉舎が利用していた建物を事務所として使い、為次は、その役員として三年間無報酬で働いたという。

一九二〇年（大正九年）七月の町会議員選挙で、二十六歳の為次は、安城新田の集落から推され、みごとに当選した。以後一九四七年（昭和二十二年）四月、安城町長に当選するまで（三十七年五月〜四〇年七月を除く）、二十三年七か月間、町会議員を勤めることになる。



1931年（昭和6年）の為次

一九二二年（大正十一年）一月、二十八歳の為次は、碧海郡購買販売組合連合会（通称九碧）の専務理事会長になった。翌年四月からは安城町農会の総代に就任、安城新田の為次ではなく、安城・碧海の大見になったのである。

新田では一九二二年十一月、為次が中心になって共同経営の機械化農場を設立した。農地と資本を二十五名が出し合い、国から補助金を得て経営した。シーマー耕耘機を入れて十二町歩から多いときは二十町歩余を耕作した。稲作だけでなく西瓜、養鶏を取り入れ、縄^{なわ}ない機を十台入れて、わら工品の出荷もしてみた。機械化大農経営の試みだったのである。だが、これは五年間で解散した。

為次は、一九三一年（昭和六年）から五一年（同二六年）まで（三十七年〜三十九年を除く）の十七年三か月間、県議会議員を勤めている。安城農林の卒業生が全県下に広がることもあって、彼の人脈はたちまち広がり、一九四三年一月から四八年三月までは県農業会専務理事会長、四七年五月から五〇年八月までの三年八か月は県議会議長を勤めている。この間、彼は、西加茂郡出身の代議士、小林銈^{かえ}の影響を受ける。小林は、夫人がドイツ人であるなどハイカラな人物で、清潔な政治家と知られ、平等・公正・公平をモットーにしていた。為次は、これを受け継ぐ人物という。

文 天野暢保^{のぶやす}